令和6年度　県立水戸第一高等学校附属中学校自己評価表

目指す学校像	○真理を愛する学問第一の校風の下、質が高く、活気ある授業や課題研究、社会と連携した教育プログラムを展開し、生徒が切問近思の姿勢で学ぶ学校 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、生徒が何ごとにも主体的に取り組むとともに、中高・学年の枠を超えて切磋琢磨する学校 ○至誠一貫・堅忍力行の校是の下、豊かな人間性や最後までやり抜く力を育むとともに、高い目標に挑む生徒をしっかりと支援する学校

昨年度の成果と課題	重点項目		重点目標	達成状況
【成果】 令和5年度の重点項目に関する7の重点目標の達成状況は、3項目でA、4項目でBであり、総括的には目標を達成できたといえる。 生徒の授業満足度は、94.4%に達した。ICT活用も積極的に進め、茨城県立中学・中等教育学校の中で活用度第1位と評価された。 米中派遣、文理・融合講座、キャリア探究対話、探究力向上セミナー、GRITセミナーなど「＋4学年」による新たな行事を企画し、中高合同で実施することができた。 新たな探究プログラム「ルーツ探究・水戸一の道」を開発し、中1から学年進行で実施に移した。 学校行事・学級活動・委員会活動・体験型部活動などの特別活動においても、中高の生徒同士の交流および連携が活発になってきている。生徒会活動においても、高校生と適宜協働して活動している。 令和6年度入学者選抜における本校の志願者数は309名であり、地域の期待の表れととらえている。 【課題】 第1期生の高校入学後の状況等も踏まえつつ、授業や行事、生徒支援等のさらなる改善・充実につなげていくことが必要である。	教育課程・学習支援の改善・充実（中高連携・教科横断での授業改善等）	①	中高連携・教科横断で授業改善を図り、生徒の授業満足度90%以上を目指す。	A
		②	生徒全員がICT端末を有するBYOD環境の下、教育・学習活動におけるICTの有効活用を図る。	B
		③	特色ある探究活動（ルーツ探究・水戸一の道）の充実を図る。	A
		④	科学の甲子園ジュニアをはじめ、他校生と切磋琢磨する「他流試合」への参加を奨励し、活躍を支援する。	A
	進路支援の改善・充実（キャリア教育の推進等）	⑤	キャリア教育を推進して進路意識を高揚させるとともに、高校と連携し難関大学や医学部医学科をはじめ生徒の第一志望実現を支援する。	A
	中高・学年の枠を超えた活動の推進（「＋4学年活動」等）	⑥	附属中学校の完成を踏まえ、＋4学年活動など中高連携での活動や特別活動の改善・充実を図るとともに、体験型部活動を推進する。	A
	健康・安全の確保と法令遵守の徹底（相談環境の整備等）	⑦	最後までやり抜く力の育成や教育相談環境の整備を図るなど、生徒の心身の健康・安全を確保する。	B
		⑧	業務改善を進め、職員の心身の健康・安全を確保するとともに、法令遵守を徹底し、違反件数ゼロを目指す。	A

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○普段の授業の中で、副教材を用いながら古文の用言、助詞、助動詞などの先取り学習を行うことができた。 ○高校進学や大学入共通テストにおける読解力や語彙力の必要性を伝えた。実際の入学試験でどのようなパターンで現古漢を用いるかなどの説明をすることで、具体的な将来を考えさせた。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○ICTを活用することで、論理展開における共有の時間が作文指導やスピーチ指導などで授業改善を図れた。 ○Scratchで作成されたもので漢文の訓読を練習させ、生徒たちに意欲的に学習へ向かわせられた。 ○欠席者への板書事項としてスライドを配信したり、誤答分析の解説スライドの配信をすることで、補習として活用できた。 ○小テストをフォームで行い、即時誤答分析をさせられた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○共通して担当する学年において授業の内容や方向性などの共通理解を図るための話し合い、相互の授業参観や進度の確認と調整を行った。しかし後学期に入り、なかなか互いの授業を参観するなど、研修の機会があまり図れなかった。
		論理的に自分の考えを表現する力を育む生徒を育てる。	○授業の振り返りや解説を通して、適宜添削指導を実施し、文章読解力と表現力の養成を図る。 ○共有七箇条などの観点や文型を活用し、考えを整理しやすくする。作文指導はスプレッドシートや共有七箇条(根拠と主張のずれを防ぐルール)、一人ディベートの活用により添削指導を継続的に実施し、表現力への指導を充実させる。 ○接続表現などの語彙指導に重点を置いた指導を適宜行う。	B		○60分授業を生かし、短文（80字以内）によるふりかえりの時間の確保に努めることができた。 ○どの学年も、生きたデータを活用し、実際の社会課題に関するテーマで作文を書く指導を適宜行った。クラッシーノートやスプレッドシートの活用を通して、他者との意見交流をする機会を増やし、相手にも伝わる内容かどうか、互いに指摘・助言することに重点を置いた指導ができた。
		基礎学力の定着を図り、段階的に全国学力学習状況調査に対応できる基礎学力の養成を図る。	○授業方法を工夫改善し、指導方法に対する研究を深めていく。 ○導入での漢字や語彙指導、中間の教科書主体の学習、終末の振り返りや問題演習と、60分間を3つのパーツに分け、見通しをもたせた学習を行う。 ○小テストや暗唱等によって基礎学力の定着を図る。間違い直しを習慣化させる。 ○新学習指導要領に対応できる基礎学力を培う学習指導の在り方について検討を進める。 ○希望者に向け、放課後補講やテスト解説を行う。 ○辞書や副教材等を利用し、学習内容の定着、活用を図る。	B		○作文指導はスプレッドシートや共有七箇条（根拠と主張のずれを防ぐルール）、一人ディベートの活用により添削指導を実施し、表現力への指導を充実できた。繰り返し、行っていきたい。 ○小テスト、暗唱ともに位置づけてできた。合格するまで繰り返し指導したし、間違い直しを徹底させた。 ○誤答分析の解説を放課後に行ったり誤答分析のスライドをクラスルームに挙げたりした。テスト前の補講を数回、希望者に行った。特にフォローアップ講座では、全学年に対してしっかり時間を確保しながら解説を行えた。
		中高一貫教育校の特色を生かした授業を展開できるような教育課程の工夫改善を行う。	○実生活に結びついた必然的な課題の設定や目指す身につけたい力の提示を毎単元心がけると同時に、グループでの話合いの学習時間を充実させる。 ○高校教員の授業参観や高校入学までに育成すべき力や実態、教科書などの情報共有をすることで、授業の工夫改善を図る。昨年度の高校教員の助言をもとに、3年生は古典文法の基礎を授業時間に位置づけ、副教材を活用しながらミニテストなども実施する。	B		○授業での学びが実生活のどこに生きてくるかを導入でできるだけイメージを持たせるように心がけたり、総合的な学習との関連を活かした課題作りに努めた。特に、３年生では「情報をまとめて作品集をつくる」という題材で総合で作成している論文を取り上げた。 ○昨年度の課題であった古典文法の基礎を、１年間を通して定着を図った。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
社会	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識（高校での学習等や「繋がり」）を高揚させながら指導する。	B	B	○中学校で習得した知識・技能を活用すれば取り組むことができる大学入試問題の演習などを通じて、中高連携および進路意識を高めながら授業を展開することができた。また、フォローアップタイムへの参加を促し、成績下位層の生徒へのバックアップも行った。次年度も継続させていきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○６０分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ＩＣＴ機器（タブレット及び電子黒板）を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○60分授業を生かして、単元のまとめの活動の充実に力を入れるとともに、多面的・多角的な問い返しなど思考力・判断力・表現力等を活用する時間を設けるように努めると同時に、中３では裁判所見学や租税教育も行い、将来への展望を生徒たちが知ることができた。
			○６０分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○中学教科内での打ち合わせや教科会において、社会科における60分授業を中高連携の在り方について検討できたと同時に高校の先生方にも周知した。
		綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、高等学校地理歴史科および公民科への円滑な接続を図るための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本の学力定着を図るとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○授業時数減への対応として、従来通り生徒が多面的・多角的に思考・判断し、表現できるようにするために手立てを考える。	B		○授業時数減への対応にやや課題が残るので、次年度に活かしたい。 ○論述課題の設定やジグソー学習などを取り入れるなかで、多面的・多角的な思考を促す授業実践を行うことができた。 ○生徒の実態を踏まえた授業展開やICT機器の活用と同時に、視覚的な理解だけでなく、論理的な理解や根本的な理解に繋ぐことができるよう、次年度も工夫していきたい。
		教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○ＩＣＴ機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B		○多様な側面から学習評価を行うことができるように努めた。 ○単元テストにおいては、思考力・判断力・表現力の評価問題について、近年の教育動向を踏まえた作問を心がけた。 ○ICT機器をより効果的に活用できるように実践を重ねる。
数学	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○生徒の実態を踏まえ、中高６年間の連続性を見通したカリキュラムの検討をさらに進めることで、より進路意識を高揚させる指導を目指す。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器（タブレット及び電子黒板）を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○60分授業の特性を生かし、復習やまとめの時間を確保することができ、またより発展的な内容にも取り組むことができるようになった。 ○一人一台端末の効果的な活用をさらに研究していくことで、グループワーク時の話し合い活動などにおいて、いくつかの解き方の考え方の共通点や相違点に着目させるなど、より充実を図っていく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○授業進度について細かい打ち合わせを行い、指導方法についても共有することができた。
		主体的に数学に取り組む態度を育成し、知識・技能の定着を図る。	○予習復習を励行し、教科書内容や基礎力の定着を図る。 ○課題や宿題について、タブレットを活用して課題の取組状況や習熟度の共有を図り、自発的に取り組む意識づけを図る。 ○担当者間の連携を密にし、日常生活に結びつく教材の精選と授業内容の充実を図るとともに、対話を通した授業で多様な見方・考え方を共有するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○生徒に問いをもたせる課題提示の工夫やその問いを活かした授業展開を実施する。	B		○少人数での習熟度別授業を展開し生徒の理解度に合わせた課題を提示したり、予習-授業-復習のサイクルにより、定着を図りやすい学習の流れを確立することで基礎力の定着を図った。。 ○課題や宿題の状況を電子黒板の画面上で確認をし、自発的に取り組む意識付けを図ることができた。 ○日常生活に結びつく教材の精選と授業内容の充実を図り、課題を生徒自身の問題と捉えられるように促し、自ら解決したいと感じられるようにすることができた。 ○問題解決を促す発問や場の設定の工夫し、問題の解決過程を重視させ、主体的に取り組めるようにしていきたい。
		数学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう授業展開を工夫し、進路実現のための学力向上を図る。	○学力調査や大学入試の傾向に合わせて、単元テスト・実力試験の問題精選を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○記述式の解答機会を適宜設け、解き方の過程や考え方を伝える力を付ける。 ○疑問や新たな気付きをもたせる問いを設定し、生徒同士の学び合いや話合い活動を充実させることを通して、新課程による大学入試に対応できるような説明する力を付ける。 ○問題解決の過程において、考えを伝えあうなどの意見交流の場を設定し、対話的な学びを積極的に取り入れていく。	B		○学力調査や単元テストの結果を踏まえ、授業内容の理解度を分析し、生徒の実態に即した授業内容の検討を行うとともに、単元テストの再テストを行うなど、類題での反復を繰り返す指導を継続して行った。 ○正解にたどり着くまでの過程を大切にさせ、数学的な表現を用いて説明できるようにするなど、記述の仕方に関する指導を多く行った。 ○教科書の問いに対して条件を変える発問をすることで、解き方の暗記ではなく様々な変化に対応する考え方を身に付けさせる指導を行った。 ○対話的な学びの活動がより活発化されるような環境づくりに努め、多様な発言が出るような課題の設定を考えていく。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
理科	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	○中学指導要領の範囲にこだわらず、体系性を重視した授業を展開することを通して、科学本来のおもしろさを追求しながら、興味・関心を高めるよう支援している。今後も、引き続き専門性を生かし、高いレベルの科学をやさしく学ぶことのできる授業の展開を目指していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○授業最後の５分間を利用したFormsでの振り返り「本時の成果」を継続することで、的確に生徒の知識定着度や疑問点を把握し、次時の授業構成に役立てている。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○高校の教員との情報交換を適宜行い指導方法の向上に努めていきたい。専門性を生かした授業の構成を続けるため、各学年４単位を２単位ずつに分割した授業を、来年度も継続していきたい。
		知的好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について探究し、科学的な思考力・判断力・表現力を身につけられるように、演示・生徒実験を多く取り入れる。 ○デジタル教科書や、デジタル図説を駆使して授業展開をするなど、デジタル教材を活用して、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○担当者の専門性を生かした授業展開を行うことで、生徒に興味・関心をもたせられるようにする。	A		○演示実験・生徒実験は年間で２０回以上は実施出来た。生徒が主体的に実験に取り組めるよう題材にも工夫をし科学的に探究する姿勢を育成できた。 ○デジタル教科書や理科便覧や学習動画を電子黒板で提示し、自然現象を身近に感じられるような工夫を続けていきたい。 ○担当者の専門分野を生かした授業展開は効果的だった。今後も継続させていきたい。
		確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○単元テスト・実力試験の問題の精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○記述式の解答機会を適宜設け、解き方の過程や考え方を伝える力をつける。 ○疑問や新たな気づきをもたせる問いを設定し、生徒同士の学び合いや話し合い活動を充実させることで、相手に説明する力をつける。	A		○テストの問題は、基本から応用、大学入試問題等も取り入れることで生徒の意欲をかきたてることが出来た。また、学習の定着度が低い生徒には、補講を実施し苦手意識を克服できるよう配慮した。 ○授業の中で生じた疑問を、単元末探究という形で生徒が自主的に調べ、それを共有し学び合える機会を設けたことで、学びが深化していく場面がうかがうことが出来た。
		中高一貫教育の理科教育の在り方、評価方法、新学習指導要領の研究を進める。	○新学習指導要領に対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○校内試験や実験レポート、毎時間の学習の振り返りなどの評価への生かし方についての研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○学習指導の在り方や評価の在り方について、教科会等を通じて高校の先生と協議し、実際の評価に生かすなど本校の理科教育の発展を目指し、連携し合うことが出来た。今後は内進生の様子を参考に、中学での学習を振り返りながら再構築していきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
音楽	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	A	○生徒が学習に主体的に取り組めるよう指導の手立てを考えたが指導力不足により指示さえ通らないクラスもあった。次年度は改善したい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○授業の進度は昨年度より下げて丁寧に譜読みをしたり練習時間を長くしたりしたのでしっかり表現できる生徒が増えた。次年度も継続したい。 ICT機器については動画編集や鑑賞教材などで用いている。またグループでの調べ学習の発表にも使用した。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A		○60分間ずっと練習するという状況にならないよう楽典的事項の指導を織りまぜるなど中学生の体力や気力に合うよう時間設定を工夫したが、クラスによっては指導にかかる時間に差が出てしまうことを改善したい。
		主体的に音楽に触れることで芸術に対する感性に気づき高める意識・態度を育てる。	○多様なジャンルの音楽や音素材に触れる機会を増やし豊かな感受性と表現する力を育む。 ○主体的に音楽に関わる態度を育て、音楽をはじめとするさまざまな芸術に対する関心・意欲を高める。	A		○生徒ひとりひとりが自分の好きな曲を発表するという時間を設けることで様々なジャンルの音楽に触れることができた。私も生徒の好みなどが理解できて参考になる。次年度は鑑賞に限らず表現でも指導していきたい。
		音楽を表現する様々な方法に気づき、自分の感性を活かした表現を目指す。	○歌唱・器楽・創作・鑑賞の各分野を偏りなく指導し、それぞれのつながりを感じながら表現する態度を育てる。 ○発表の場を設けることで他者の表現なども参考にしながら個性豊かな表現を工夫する意欲を高める。	B		○歌唱・器楽・創作・鑑賞の全てを指導できた学年もあるが、指示が行き届かない１学年では創作を扱えなかった。次年度はそのようなことがないようにしたい。演奏の発表については今までと同様に設けていく。
		音楽を理解しよりよい表現につなげるための基礎的な知識を得る。	○音楽の諸要素(形式・構成・音色・リズム・速度・旋律・テクスチュア・強弱)について学び理解を深めることでさらに豊かな表現を目指す。 ○基本的な唱法・奏法・創作の知識を身につけ、豊かな音楽表現を目指す。	A		○音楽の諸要素については指導のたびに触れ知識だけではなく実際に表現につながるよう配慮した。表現のための経験値に個人差があるため基本をしっかり指導するよう心がけていきたい。
美術	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	A	○発達段階に寄り添った題材を扱っているが、多様化する生徒の興味・関心に適切にアプローチできているか、研究を継続するが必要である。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○黒板での板書はせず、電子モニターでのスライド資料の提示、課題説明を行い、わかりやすい授業展開を意識した。次年度は課題点を改善し、充実した資料作成に努めたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○中高合わせた授業時間が多く、研修の時間を確保することが難しかった。芸術科内、また技術家庭科とも連携し、実技教科の研修を増やしていきたい。
		鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○生徒の興味、関心をもたせるため、より多くの作品に接する機会を増やし、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせるとともに、ものを見つめる目を養い、そこから真実を発見しようとする態度を身につけさせる。	B		○絵画などの制作を行う題材であっても、導入時に鑑賞を行うことで美術作品を知る機会を増やしてきた。また、絵画・彫刻といったファインアートに偏らず、デザインの題材を扱い、様々な作風・ジャンルの作品を学ぶ機会を提供できた。
		自発的に、課題に取り組む姿勢をもたせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、段階的に工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○自分の表現を発表する機会を増やし、その表現を生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。	A		○昨年までの流れを汲んた中学３年間と高校へ繋がる授業展開をつくるために時間をかけ教材研究に取り組んだ。さらに充実した展開を研究していき、生徒の実態にあったバランスのとれた展開を研究していく。
		新たな教材研究に努める。	○新しい展開を生むための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの実演、指導ができるよう努める。	A		○教材研究を行うことで、新しいアイデアを取り入れながら授業展開を考えることができた。授業内で高いレベルの実演を行うためにも、教材研究を続けていきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
保健体育	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	A	○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が教え合うこと学び合うことを促進したい。進路実現に向けて体力面からも積極的にアプローチしたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○老朽化していたマットや跳び箱なども補充でき、器械運動や球技で必要な用具を揃えることができるようになった。効率の良い授業展開が可能になったため、中学生用のボールや、マットなど今後も充実させたい。 ○引き続き、振り返りで活動の記録、技の習得のため動画撮影に加え、ダンスの授業で活用し、生徒の意欲を高めることができた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○研修会への参加や教科会を通じて授業方法の改善を図り、生徒の主体的活動の契機としたい。ICTの活用についての事例やAEDを携行するなど持久走に関する安全確保についての検討などの研修ができた。
		自己の体力を把握させるとともに、健康や運動に関する意識を高める。	○昨年の体力テストの結果を反映し強化が必要な分野(柔軟性・瞬発力)について、体育授業のW-UPで、毎時、ストレッチや補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力の向上を図る。 ○投動作の強化向上を図るため、教具を工夫し、練習の機会を設ける。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	A		○準備運動で、ランニングやストレッチなどをとおして、弱点補強を行ったり、個人の体力アップチャレンジカードを活用して、自分に合った体力向上の取組を設定したりした。その結果、体力テストのスコアが大きく上昇し、県から「体力つくり奨励賞」を受賞した。今後も、更に体力アップを図ることが課題である。 ○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、健康面への配慮を念頭におきながらも体力の向上を図っていきたい。また、２回目となった生徒の実行委員を組織した３学年縦割りでの校内駅伝大会を計画、実施できた。
		授業時のケガの防止に努める。	○運動時の安全に配慮した場の設定等を計画的に行いながら、ケガ防止のためにの正しい動きを身につけさせる。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、コロナ対策、熱中症対策、交通安全に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	A		○本校の特性や、各学年の実態に合わせて、基礎体力の養成や基本スキルの習得に重点を置き、各種目領域で取り組んだ。教具やルールを工夫して、ケガ防止に努めた。 ○ガイドラインや保健厚生部の基準を守りながら、感染症の予防に努めた。保健分野の授業内容などを生かして、健康や衛生的な生活を目指したり、養護教諭と連携して、健康で安全な生活に向けた取り組みがなされた。
		「保健」をとおして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通じて、思春期における生徒の健全な成長を目指し、外部講師等の活用を図った授業を展開する。 ○「保健」の授業を通し、思春期における自身の健康課題と社会的な課題における自身の役割を理解させる。 ○ICTの導入及び積極的活用を図る。	B		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。
技術・家庭	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	発問など生徒との対話を意識して進めることができた。今後は、より効果的な発問やメリハリのある授業展開を確立していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		限られた単位数であるため、授業の進度や内容の検討・改善をし、より効果的な授業計画を模索していきたい。ICT機器についても授業の中で活用はできたが、より効果的な活用方法を研究し続けたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		昨年度と違い、担当者が複数となったため、情報を共有しながら進めることができた。次年度以降も、各学年に配慮した年間計画や各時間の授業展開を見直し、改善していきたい。
		生活と技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能の習得を目指す。	○小テストを定期的に行い、基礎的な知識の定着を図る。 ○必要用具が1人1つ行き渡るよう整理し、全員が十分な実践的学習時間の確保を目指すことで、基本的な技能の習得を図る。	B		定期的に小テストやまとめ等を行って、基礎的な知識の定着を図ることができた。必要用具については、少しずつ整備を進めることができた。次年度以降も引き続き、全員が経験できるように整備していきたい。
		衛生面や安全面に留意し、体験的な活動から実践的な力の定着を図る。	○実習室や使用する用具の管理を徹底し、安全に製作や実習、実験などの活動ができるようにする。 ○状況に応じ安全を考慮した上で、より多くの体験的な活動ができるように努める。	A		何度も繰り返し注意を促すことにより、衛生面や安全面で生徒自身の危機管理能力を養えた。しかし、十分に実習を行えていない分野もあるので、時間の確保、状況に応じた対応を検討していきたい。
		生活や社会の中から問題を見いだし、よりよい生活へ改善しようとする意識の向上を目指す。	○グループ活動やペアワークを取り入れ、学んだことを生活の中で活用できるように努める。 ○自らが日々の生活の中で、主体的に課題発見と改善策考案を模索し続けられるように、ICT活用だけでなく、より体験的な学習の場の提供を目指す。	A		ICT機器を用いた個人ワークを積極的に取り入れ、個々の課題と向き合う時間の確保に努めた。また、グループ活動やペアワークを通して、個々の意見交換や話し合い活動をし、より深い学びに繋げることができた。次年度もICT機器を効果的に活用し、一人ひとりが主体的に取り組める工夫を検討していきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
外国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	４技能をバランスよく支援することで、生きて使える英語の習得を目指して授業を構築して、支援を行っている。より実践的な力が身につくように、教科書を活用しながら場面設定を意識した言語活動を今後も取り入れていく。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		現在行っている習熟度別授業を継続し、授業内容の充実を図っていきたい。基礎基本の定着をしっかりと行うことで、英語力の土台を作り、自信をもって英語を使えるように支援していきたい。ICT機器の活用については、より効果的な活用について研修を進めていきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		お互いの授業参観を通して、研修を進めてきた。今後はより具体的な目標をもって研修を進めていきたい。
		実践的な活動を通して、場面を想定したコミュニケーションをとるための基本的な知識と技能の定着を目指す。	○基本的な表現の理解を深めるために、授業時間内に場面を想定した活動の時間を十分に確保することで、知識の定着を図る。 ○授業内容ごとに自作プリントを作成し、基礎基本の定着を図り、言語活動における表現力の向上を図る。	A		授業内容に応じた自作プリント（内容理解、例文練習、文法練習、単語練習等）を作成して、授業内で適切に活用することができている。今後も継続して活用することで、基本的な表現の理解を深められるように支援していきたい。そして、言語活動の充実を図ることで、生徒一人一人の英語力の向上を図っていきたい。
		日常的な話題や社会的な話題について、情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりする力の定着を目指す。	○ICT機器を活用して、自己の考えや意見を表現する機会を単元のまとめとして設定することで、思考力や判断力の育成を図る。 ○GoogleスライドやJamboard、Flipgridなどを活用しプレゼンテーションの機会を設けて、表現力の育成を図る。 ○「話すこと＜やりとり＞」を意識した授業展開の研修を進める。	B		様々なテーマを授業で扱うことで、生徒が日常的な話題や社会的な話題についても考えをもち、意見を表現することができている。今後は、単元ごとの指導事項を活用して、より具体的な表現ができるように支援していきたい。プレゼンテーションの活用を通して、表現力の向上に向けた、課題設定をしていきたい。また、即興的なやり取りの場を設定していきたい。中間指導を取り入ることで、活動して終わるのではなく、英語力を適切に習得できるような支援方法の研修をしていきたい。
		自らの学習を調整する力の育成を通して、主体的に学習に取り組む態度の定着を目指す。	○学習サイトを用いて、自ら学習内容の定着を図る場を設定し、目標を明確にすることで主体的に学習に取り組む態度の育成を図る。 ○授業で学習した内容の確実な定着と自らの学習を調整する力を育成するために、振り返りの時間を毎時間確保し、次時の学習への意欲の向上を図る。	A		学習サイトを活用している生徒が多く、生きた本物の視聴覚教材を活用することで、単語の理解が深まったり、単語練習フォームや例文練習フォームを活用することで、学習調整力が高まっているようである。自らの学習調整能力を育成することを意識して、今後は主体的に取り組むことができるような課題を作成していきたい。振り返りを活用して見通しをもち、学習に取り組めるような態度を育成していきたい。
教務		教育課程の工夫改善をする。	○授業時間増を生かした教育課程を作成し、少人数指導を行うことで、学習内容について発展的なものまで扱えるように努める。また、教育課程を変更した効果について、今年度の検証する。	A	B	少人数指導を行う英語、数学に関しては、発展的な内容の指導や習熟度別授業を行うことができた。また、理科と社会で授業を２種類に分けることで分野別に専門の担当者が授業を行った結果、教育効果を高めつつ効率的な授業を展開できた。教育課程については、数学の授業を増やしたことで、基礎の定着から発展問題まで、余裕を持って取り組むことができている。
		授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業のアンバランスにも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、授業時数の均一化をはかる。また、夏季課外を円滑に実施する。	B		予定された出張・年休に対する授業交換は、しっかりと行うことができた。一方で、突発的な年休に対する授業交換には限界があり、自習課題を用意して対応する必要があった。また授業交換の自由度が低く、交換による授業の種類のバランスまで考慮することは困難であった。
		授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間授業をより充実したものとするため、教育改革部と協力して、教員相互による授業研究などを実施する。また、ICT機器(タブレット及び電子黒板等)を利用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		教育改革部主催の授業公開を行ったが、研究というところまでは十分踏み込むことができなかったのが課題である。一方で、ICT機器の活用は十分に行うことができた。
		教育活動を公表する。	○学年と連携して、小学生対象の水戸一高附属中説明会、公開授業の実施により学校を公開する。また、情報部と連携して、ホームページを通して、地域住民等に広く水戸一高附属中の教育理念を周知する。	B		水戸一高附属中説明会は、生徒が積極的に関わりながら実施することができた。また、公開授業は、ガイドツアーの実施や茨城県の取り組みであるラーケーションの影響で、平日開催にも関わらず多数の児童生徒が見学に来ていた。
		統合システムを円滑に運用する。	○支援システムの円滑な運用を進めるために、使用法の徹底や活用法の研究をする。システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B		支援システムについては、だいぶ計画的に利用することができている。しかし、効率的に運用して授業研究時間の増加をするところまでは到達できなかった。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りをもたせ、学校生活を充実させる。	○学校行事を適切に配置し、時に臨機応変に対応することにより、各行事の円滑な実施と充実に努め、新たな伝統の創造を目指す。 ○中高合同で実施する行事においては、中高6学年での実行委員会を組織できるように特別活動部が橋渡し役となり、双方に教育的な効果が生まれるよう配慮する。 ○中学独自の行事においては、6年間を見据えた内容になるよう考慮した内容を目指す。	A	A	学校行事において、実行委員会が中学生を含めた形で始動し始めている。中高合同で実施する行事であることの意義を考え、中学生の意見や発想を収集しながら組織づくりが進んでいる。今後も特別活動部が中心となって中高連携の橋渡しを行っていく。 中学独自の行事として、新入生歓迎会、３年生を送る会を生徒会が計画して実施した。また、高校生との給食交流会も実施した。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○高校と連携して四期にわたる「体験型部活動」の円滑な実施に努める。 ○体験活動を充実させ、選択肢が増えていくよう配慮する。高校との連携においても、双方に教育的な効果が生まれるよう内容を精査していく。	A		各学年の参加率は、中３の本入部が７割、中２の仮入部が７割、中１の体験型部活動は８割（吹奏楽部を含む）である。サッカー、陸上、バドミントンなど、地域クラブでの活動に参加している生徒が増えてきている。
	学級活動においてキャリア・パスポートを活用する	○各学年の学級活動においてキャリア・パスポートを作成し、様々な活動を通して身につけた力を整理したり、社会の中での自身の在り方を考えたりできるようにする。	B		行事ごとにキャリア・パスポートの作成を行っている。今後は活用の仕方についても検討していきたい。
進路支援	生徒一人ひとりが深い自己理解に根ざした高い進路目標を抱くことが出来るように、キャリア教育を推進して進路意識を高揚させる。	○高校と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○自己理解や職業関連のプログラムや大学に興味関心を持つことができるような進路学習を円滑に実施し、キャリア教育と進路指導の両面で将来を見据えられる生徒の育成に向けて、指導の充実を図る。	B	A	○各学年進路講演会を企画実施。大学入試に向けての進路意識を生徒に持たせることが出来た。 ○進路学習の実施については、昨年度の流れを引き継いで実施した学年もあったが、基本的には学年に任せる形となったため、学校として系統立てた効果的な進路学習を実施していくことを次年度以降の課題としたい。
	生徒の学習意欲を引き出し、興味関心や得意分野を生かすことができるよう支援をしていくとともに、学習に対し不安感を抱く生徒への学習支援も展開していく。	○他流試合学習会や学力向上学習会を定期的に実施し、各種の科学コンテストや検定試験等で成果をおさめられるよう支援していく。 ○フォローアップ学習会を定期的に実施し、学習に対して不安感を抱く生徒に個別に対応し支援していく。	A		○他流試合勉強会、学力向上勉強会を企画実施。未履修の分野でも意欲的に勉強会に参加し、コンテスト等で高い成績を収めようと士気を高める姿が見受けられた。 ○フォローアップ学習会と称して、学習に不安がある生徒が気軽に教員に質問できる機会を年間を通じて約20回実施した。投げ出さずに努力する姿勢が身についてきている生徒の様子が一定数見られ、効果はあったと感じられる。
	学年間の連携を図り、生徒や保護者に、機を捉えて適切な進路情報を提供する。	○学年及び高校と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、生徒の現状に合わせた家庭でのかかわり方等の情報提供に努める。	B		○学年の進路支援部で連携し合い、よりよい進路指導の在り方について議論出来た。生徒に対しては時期に応じた情報提供や啓発が出来たが、保護者への情報提供は、保護者面談等に資料提供等を行った。
	6年間を通して見渡せるような進路指導の流れの構築を進め、それらの情報・データを職員間で共有できる環境を整備し、一層の進路指導の充実を図る。	○県内外の附属中学校や中等教育学校の進路指導形態を調査・分析し、本校における高校接続までの進路指導の流れを構築する。 また、この分析したデータベースを活用して職員研修等を実施し、指導に有効と思われる形態についても研究を進める。	A		○業者に講師を依頼し模試データ分析会を実施した。また高校にも模試データを回覧し、中高連携の足掛かりとした。また、高校1年と情報を密にし、附属中から進学した生徒の成績データを活用研究しすることが出来た。
教育改革	チャレンジ・プロジェクト(中学:ルーツ探究・水戸一の道、高校:＋4学年活動等)の充実を図る。	○ルーツ探究・水戸一の道や課題研究、知道プロジェクト発表会等を通して、自ら課題を発見し、多様な視点から論理的に考察する力(切問近思の学習姿勢)や自らの考えを他者に伝える力を培う。 ○米中派遣、文理・融合講座、キャリア探究対話、探究力向上セミナー、GRITセミナーなど＋4学年による中高連携の活動を推進する。 □	A	B	○ルーツ探究・水戸一の道ではそれぞれが課題を持ち探究内容を英語で発表したり、外部の人たちを招くなど、充実したものとなった。 ○「文理・融合講座」では、様々な分野においての講義を聞くことができた。キャリア探究対話、探究力向上セミナー、GRITセミナー、心に火をつけるフォーラム等については、生徒の満足度が95%を超えた。
	教員の授業力向上を図る。	○中高合同の授業改善チームを中心に、教科横断で授業改善を推進していく。 ○校内授業公開、校内教員研修会、先進校視察等を積極的に行い、指導技術等の向上を図る。	B		○「授業公開」は重点期間を定め特定の授業を推薦し、改善を試みた。中高合同の教科横断での授業改善の検討中。 ○県外視察は行き先を見直し、人数を増やした。多忙な毎日だが、魅力的な研修を企画したい。
	開かれた学校づくりを推進する。	○「＋4学年活動」を中心とした中高連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取組を広く周知する。	B		○「＋4学年活動」で先輩と学ぶ機会が持てたことは、将来を見つめる上でよい刺激となった。 ○「学校公開」では、ガイドツアー「水戸一の道」と御城印で地域住民の皆様にも楽しんでいただいた。
	充実した教育活動により、未来を担う人材を育成する。	○「総合的な学習の時間」を通して、進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像について考えを深めていく態度を育む。 ○「道徳」を通して、道徳的判断力や道徳的実践意欲・態度を育む。 ○総合的な学習の時間や道徳などの授業において、中高合同授業を実施することで、異学年間交流を図るとともに、生徒の多面的・多角的な思考力・判断力・表現力を養成する。 ○毎日の学習の振り返りやキャリア・パスポートなどを通して、主体的に学習に取り組む態度や自身のキャリアを形成する力を育む。	B		○「総合的な学習の時間」は学年任せになりがちだったので、年間計画や具体的な指導計画を見直す。 ○生徒の実態に応じた道徳を実践することができた。道徳の授業担当者をローテーションで行うことにより、多様な視点から授業を展開できた。 ○振り返りシートやキャリアパスポートを通して、主体的に学習に取り組むことができた。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
生徒支援	基本的生活習慣の確立を図る。	○教員が率先して挨拶を励行し、校内外で挨拶しあう態度が自然となるようにする。 ○ボランティア活動を奨励し、地域等で進んで貢献・奉仕しようとする態度を育む。 ○水戸一高附属中生として誇りの持てる行動を問い、規範意識の高揚を図る。	B	B	○挨拶の励行やマナーアップ委員による挨拶運動などを通して、挨拶をする生徒が増えてきた。場所や相手を問わず自然にできるようにするにはさらなる働きかけが必要である。 ○様々な活動を通して、進んで貢献・奉仕につながる体験をすることができた。それらを自分ごととして、自分たちで考え、実行できるようさらなる工夫が必要である。 ○年度初めや長期休業前後に全校に話をしたり、各学級で訓話や注意喚起等を繰り返し行った。
	生徒が安心・安全に学校生活を送ることができるよう、連携を取り合い適切に支援する。	○教育活動全体を通して、思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高附属中生としての自覚と責任ある行動を支援する。 ○生徒の心の変化や悩みを把握するためにアンケートや面談の機会をより多く設け、生徒支援上の問題に対して予防的に対応できる体制を整える。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を的確に把握し、生徒の心身の健全な育成を支援する。また、高校とも情報を共有し、多くの教員の目で生徒を見守る体制を整える。 ○インターネットやスマートフォン、タブレット等の適切な使用法を家庭と連携しながら繰り返し指導し、情報モラル意識の向上を支援する。	B		○オリエンテーションや学級活動において構成的グループエンカウンターを取り入れ、人間関係づくりに取り組んだ。他者の立場に立ったりかかわり方を学んだりするピアカウンセリングも計画的に実施したい。 ○毎月のアンケート調査にこころとからだのチェック項目や相談希望を追加し、生徒の変化を把握し、早期対応をする流れを構築できた。 ○生徒支援の記録や生徒指導部員による情報交換の場を設け、情報共有と連携した生徒支援の体制ができた。 ○スマホ家庭のルールについて、各家庭で年度初めに見直しを行っていただいた。また、実態に応じた自作資料の作成や外部機関の講習会を計画するなどして意識の向上を図る場を設定できた。
	交通安全の意識を向上させる。	○生徒通学路の安全状況を把握・確認し、関係機関とも連携して生徒が安心・安全に通学できるよう対応する。 ○法規に従った安全な行動について繰り返し指導する。特に、自転車の乗り方については被害・加害両面についての注意を促し、自転車による交通事故ゼロを目指す。	B		○集団下校などを通して、地域の様子や生徒の登下校の状況等を把握するとともに、注意喚起をすることができた。 ○自転車安全教室の実施、マナーアップキャンペーンでの交通安全の呼びかけ等を行い、安心安全な通学に対する意識づけを行うことができた。
	いじめ問題に適切に対応する。	○生徒と共に歩む教員集団で生徒の看護や協働を徹底し、いじめの未然防止に努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見する手段の一つとして、毎月の学校生活アンケートを実施して生徒の状況を綿密に確認し、それに対して各部署や家庭との連携を図り、迅速かつ適切に対応する。 ○教職員対象の校内研修を実施し、いじめに対する意識を高める。	B		○年度初めに生徒支援方針を確認し、生徒と共に過ごす居場所づくりを推進したことで、未然防止や早期発見につなげることができた。今後は、生徒の主体的な活動によるいじめ防止活動も取り入れる。 ○毎月のアンケート調査に対して、生徒に寄り添い早期対応を実践したことで迅速な手立てをうつことができた。 ○具体的な事例をもとに、いじめに対する認識や適切な対応に関する研修会を実施し、共通理解を図るとともに、未然防止や早期対応ができる体制を強化する。
情報	校内ICT環境の改善・整備を適切に行う。	○GIGAスクール構想に基づき、適切な教育が進められるようICT機器の更新や整備を行う。 ○生徒「情報委員会」の活動のあり方について助言をおこない、ICT環境の適切な使用に生徒が積極的に関われるよう支援をする。	C	B	第１学年生徒が使用している端末が使用から４年目に入っており、故障や不具合が増加している。教室での充電環境を整えるなどの対策は行ってきたが、現状として学校が保有する予備端末だけで対応することが困難になっている。次年度は生徒・教職員用の端末の更新があるので、生徒予備機端末へと転用でき、問題の解決が図られる見込みである。
	学校情報発信の充実を図る。	○生徒「情報委員会」の活動内容を、適切な情報発信をできるよう支援する。 ○Webページの改編に情報委員会生徒のアイディアを生かす。 ○ブログを通じた学校の教育活動の発信を年間を通じて定期的に行う。	B		ブログを通じた広報活動は、昨年度よりも大幅に頻度を高めて行うことができた。情報委員会の活性化が課題である。
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○教員が教育の情報化を適切に進められるように、ハードウェア、ソフトウェアの両側面から支援する。 ○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○情報セキュリティについて、生徒や教員に対して個人情報の厳重な管理やウィルス対策等について、注意喚起・情報提供を行う。	A		○教育の情報化に向けて、県教委主催の研修の内容やICT支援員から提供された情報を教職員に速やかに共有することができた。 ○ICT支援員による生成AI等の職員研修を充実させることができた。
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○学校評価の質問項目を継続検討し、より学校運営に生かせるような形を目指す。 ○保護者からの回収率を上げる方策を実施する。	B		Google classroomやClassiを活用して保護者に提出をお願いしたり、保護者からの意見に回答したりすることができた。より一層、回収率を上げるような対策が必要である。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
図書	図書館司書との連携を深め、自ら課題を発見し学ぶ生徒を支援する図書館として一層の充実を目指す。	○中学生向けの図書オリエンテーションにT.Tとして参加し、フォローする。 ○司書との連携を深め、教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出利用に繋げる。授業等のニーズに合わせた、県立図書館の本の貸出の利用を勧める。 ○選書について、教科担当からも意見を多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ沿い、中学生向け選書にも配慮をしてゆく。	A	A	・今年度も、前期、後期ともに継続して川又書店の店頭選書を実施できた。店頭選書の本をＰＯＰで提示し、紹介する機会を増やすこともできた。 ・各学年で、総合的な学習の時間に、司書がゲストティーチャーとして、論文検索、論文の作成の仕方、「朝日けんさくくん」や論文検索ツールなど効果的な活用など、丁寧に生徒に指導をしていただいた。
	読書に親しむ環境を整え、読書への啓発活動を行う。	○総合的な学習の時間での利用をはじめ生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むよう、図書室でのPOPや新刊紹介、講義室や廊下に新聞閲覧コーナーや特設図書を設置する。 ○おすすめの本を紹介する等のイベントを感染状況に留意しつつ開催する準備を進め、生徒どうしの読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○図書委員会有志による川又書店の店頭選書、展示を実施する。 ○除籍本をもらい受けて、各学年に朝の読書用に配備する。	A		・廊下に、国内研修旅行や海外研修旅行、講演会など、学校行事に関連する資料や教科、領域等の授業時に必要な資料を複数、準備していただいた。 ・読書感想文で県知事賞の受賞を初め、県に複数名入賞したので、ＨＰで発信できた。 ・川又書店で委員会有志でおすすめの本の展示コーナーを今年度も設置できた。
	高校生の委員会と連携し、生徒委員会活動のさらなる活発化を目指す。	○週２日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、生徒委員を主体的に運営できる生徒の育成を目指す。 ○学苑祭の展示やビブリオバトルなど、中高校ともに参加できるイベントを効果的な方法について検討、実施を進める。	B		・中学図書委員のアイデアで企画を新たに設定、実行できた。 ・図書委員が選書した学級文庫を毎月、貸し出しすることができた。除籍本をそれぞれ学年に振り分け、朝の読書用として整備することもできた。 ・茗溪学園中等部の図書委員とオンラインで交流し、委員会活動の報告や本の紹介など行うことができた。
	機関誌を着実に発行し、本校の歩みを正しく記録する。	○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に行う。 ○中学生にも寄稿し、図書館報2誌の制作を計画的に行い発刊する。	B		・図書部会で、知道会館の紀要や年報など、資料整理を行った。 ・図書館報２誌の制作も、生徒の意向を踏まえ、計画的に発刊できた。
保健厚生	学習環境の整備に努める。	○校舎内外の美化活動の取り組みを推進する。また、各種感染症対策をおこなったうえで、衛生状態が保たれるように取り組みを行う。(教室等のゴミ箱を廊下に出し、ゾーニングを徹底するなど。) ○教室内・各教科準備室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査を実施する。 ○モップ交換や普通教室のカーテンのクリーニング、ワックスがけを行う。 ○施設・設備の安全点検を行い、環境の安全の確保を図る。 ○カウンセリング室の整備継続や感染症疑い生徒の待機場所確保を行う。 ○毎日の健康観察の実施による養護教諭との情報共有。保健調査や各種健康診断等の実施。 ○緊急時の各種マニュアルの計画的な見直しと各種研修会等の実施。 ○教室に、避難経路の提示をする。	B	B	○本年度より、毎月の安全点検を、高校と連携して実施することができた。指摘されたところをすべて直すところまで現状至っていないので、スムーズに解決できるよう努力したい。 ○掃除やモップ交換、ワックスがけを通して学習環境を整えることができたが、感染症対策のためにも、しっかりした取り組みを継続したい。 ○中学棟の廊下は給食の配膳場所であるが、雨天時に体育館との移動経路になってしまうことがあり、衛生状態について配慮が必要と考える。 ○今後も、感染症予防の継続が予想されるので、衛生的な学習環境の保持のため持続可能な取り組みについて検討し実践したい。 ○毎日の健康観察の実施継続とそこから得られる情報の活用を検討する。 ○部員の連携がスムーズで様々なことに取り組むことができた。ありがたかった。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	○健康診断や保健室利用時などの機会を捉え、それらをいかした保健指導を行う。 ○保健体育の学習や各教科、HR、行事等との関連をもたせた、事故・けが等の予防や各種感染症に対する予防を徹底するよう指導する。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラーとの連携を密にして、保健日誌の活用や情報交換、出身小学校との連携等を行うことで、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」の毎月1回の発行。 ○災害時における避難訓練を中高合同で行い、校内の状況と避難経路を確認し、防災に対しての意識を高めるよう指導する。引き渡しに関する、中高の基準等について確認し、非常時に備える。 ○中学職員の保健厚生部職員の連携と各種講習会や講演会の実施を積極的に行う。 ○栄養職員と連携し、衛生的で安全な給食指導の実施と食育の推進。 ○アレルギー対応委員会での共通理解や連携を密にし、食物アレルギー生徒の対応を万全に努める。	B		○中高合同の防災避難訓練において不審者対応や地震からの火災を想定した取り組みができた。引き渡しを想定した、方面別集団下校訓練が実施できた。前年度とは違うルートで実施したり、集会形式としてグループワークや２つの委員会の提案などを取り入れたりして、自分事として参加できるよう改善して取り組めた。 ○新入学予定者の健康や生活態度に関する情報の取り扱い、内進生の高校進学に伴う各種情報の引き継ぎのための方策を早急に検討する必要がある。 ○学校保健委員会を２回開催し、学校医を招いて関連する多方面からの報告・協議などを実施できた。 ○給食の異物混入事案が昨年度に比べ大きく減少した。 ○生徒に関する、健康面や生活面などの知り得た情報の適切な取り扱いについて、共通理解をもとに慎重に検討する必要がある。 ○必要に応じて、身体測定を行うなど積極的で柔軟な施策がとられた。 ○研修旅行時の感染症対策を更に徹底していく必要がある。 ○各学年、外部講師を招いての生命や安全に関する教育を実施することができた。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
1学年	自他を思いやることができる温かい人間性を育む。	○毎日の振り返り(Classi 学習記録)に対するリアクション、コメントで生徒とのつながりを構築する。 ○こまめな家庭連絡や、三者面談を通して家庭との意思疎通を密にし、家庭と学校との両輪で生徒を支援していく体制を整える。 ○毎月の学校生活アンケート後はすぐに面談を実施し、生徒支援上の問題に対して予防的に対応できる体制を整える。 ○年度初めや席替えごとなど、あらゆる機会に構成的グループエンカウンター(SEG)などを実施し、お互いを認め合える機会を設定する。	B	B	○毎日の振り返りを通じて生徒とコミュケーションを図り、生徒の変化をいち早く察知し信頼関係を構築することが出来たと感じている。 ○家庭には機会を逃さず密に連絡を取り、家庭とのやりとりは、学年全員で共有し、生徒面談は全員の学年スタッフが一通り全員面談するよう計画的に生徒面談を実施するなど、学年全員で生徒を支援する体制を整えることが出来た。 ○学校生活アンケート後の面談は時期を逃さず早急に実施。問題が深刻化する前に学年で役割分担をし、生徒達が安心して学校生活を送ることが出来る雰囲気作りには力を入れてきた。 ○あらゆる機会に構成的グループエンカウンター(SEG)などを実施。生徒にSEGを企画させ学年レクとして実施をすることも出来た。お互いを認め合える雰囲気が構築できつつあると感じられている。
	楽しみながら高みを目指す学びの姿勢を涵養する。	○授業を大切にし受動的な学習から、能動的主体的な学習への転換を進めていく。 ○大学入試を見据え、機に応じて適切な進路情報を提供し、進路学習の充実を図る。	A		○授業第一、授業を楽しみながら学びを深める姿勢の重要性を常に生徒に訴えかけてきた。主体的に授業に参加する生徒がほとんどで、生徒の授業に対する満足度は高い。 ○夏にオープンキャンパス、冬に学部研究と、6年間を見据えた進路学習に取り組んできた。大学を身近に感じ高い目的を設定する生徒が多く見受けられるようになった。
	当たり前のことを大切にする自己管理力の定着を目指す。	○個別の凡事徹底の声かけ。 ○身の回りの整理整頓の徹底。 ○提出物の期限を守る呼びかけ。生徒心得事項の徹底。	B		○当たり前のことを当たり前に実施することの大切さを訴えかけ、躾を徹底してきたが、生徒によっては定着度が低い生徒もいる。生徒同士で呼びかけ注意をし合う体制が整うクラスもあり自律的に行動できる雰囲気作りが出来てきている。
2学年	学習指導の充実と授業改善の推進する。	○アカデミックな授業－附属中生が持つ「凄み」(ポテンシャル)を輝かせる授業と教育活動を行う。 　教員、生徒がともに真摯に学び合う姿勢を追求する。 ○主体的に学ぶ意欲・態度の育成－生徒が「深い思考力や判断力、表現力」を身につけ、更に高度な探究や視野の拡大につながる授業や学習活動を行う。	B	B	○学校の教育活動全体を通して、生徒の授業の理解度も高くなっていると考えている。 ○面談は必要があれば適宜実施してきた。特に、成績下位層の生徒への面談や、学校生活アンケートで見受けられた配慮が必要な生徒への面談を、スピード感をもってこまめに実施してきた。それらを通して、生徒との信頼関係を構築をを目指してきた。また、学年集会を通して、学習面に対する意欲喚起を促すため、学習方法のアドバイスやメンタル面について繰り返し助言指導してきた。今後これらを継続していきたい。
	保護者や地域、高校生との更なる連携	○年2回の三者面談を行い、保護者との意思疎通を十分に図りながら、生徒の指導をおこなっている。また、信頼関係の構築を醸成する。 ○授業公開や学校説明会、ホームページ、classi等により、地域だけでなく、保護者に向けた情報を発信する。	B		○欠席者等への家庭連絡はもちろんのこと、生徒たちとこまめに対峙することにより、「面倒見の良い学年」づくりへの布石は打てたのではないかと考えている。classi等での配信、二者面談も細目に行い、生徒だけでなく保護者の期待等に応えるべく、保護者に対しても「面倒見の良い学年」へを昇華させていきたいと考えている。
	豊かな人間性(想像力に富む生徒)と心身の逞しさの育成	○知・徳・体のバランスが取れたリーダーとして世界で活躍していけるよう、本校のあらゆる学習活動、学校行事、体験型部活動、学校外活動等を通して、互いの違いや多様性を認め合い、協力・協働する中で、自分の可能性を見いだし、「高い志」をもって何事にも挑戦していく逞しい心身を育成する。	A		○学校行事、委員会活動、体験型部活動、＋４活動への事前指導を通して、積極的参加を促した。 ○２回の面談に際し、保護者への資料を配付する（学習の見通しやアドバイス、今後の予定や目標など）ことで、その分生徒一人一人に合った密な内容の面談を行う時間が確保できた。それ以外にも、担任が生徒と関わる時間を多くもつことができるよう、様々な面において差配した。次年度も、継続していきたい。
3学年	教育・学習活動におけるICTの有効活用と、教育課程・学習支援における中高連携・教科横断での授業改善等に取り組む。	○ICT教材を効果的に活用することで興味・関心の枠組みを広げ、自ら進んで強化横断的に学習内容を掘り下げる意欲を高める。 ○外部模試(学力推移調査・アドバンストテスト)や各教科単元テスト・みらいPASSジュニア等のデータを共有しながら、中高連携の礎を築く。	B	B	○Classiによる毎日の振り返りをグラフ化することにより、自らの学習について客観的データの積み重ねとして振り返ることで、定期的な見直しを進めてきた。高校進学後も、似たような取組みを続けることで、より効果的なものになると考えている。引き継ぎに向け、各種テスト等のデータの共有化を計画したい。
	中高連携の要として、中高・学年を繋ぐ活動の推進(「＋4学年活動」等)に取り組む。	○各種行事において、これまでの経験をもとに主体的に取り組むとともに、下級生をリードし、高校と中学の橋渡しを担うことを意識した活動を行う。 ○委員会活動、体験型部活動、＋4学年活動等への積極的な参加を促し、多学年とのコミュニケーションを通して自らの人間性を磨く機会を増やす。	B		○学校行事の実行委員や中学委員会活動において、下級生をリードする姿が多く見られた。また、各部活動や東大探訪、海外派遣等において先輩方と積極的に関わり、自らの立ち位置を模索しながら、主体的に活動する様子が見られた。来年度からの活躍に期待したい。
	次の3年間に繋がる進路支援の改善・充実(キャリア教育の推進等)に取り組む。	○一人一人の進路実現に向けて、企業探求活動や各種セミナーへの参加を促すなど、自らの将来像を具体化する土台作りができるような進路支援を行う。 ○日々の振り返りの蓄積等を活用した客観的データを元に、目指すべき理想像に向けた取り組みへの支援を行う。	A		○企業探求においては、実在の企業からのミッションに対して、自分達のできることを精一杯考えながら取り組む姿が見られた。各種セミナー等への参加呼びかけからは、学校外での様々な挑戦を支援することができた。今後も校内での活動に留まらず、無理のない範囲で得意な分野において積極的に学校外の活動を続けることを期待したい。

※評価基準　A:十分達成できている　B:達成できている　C:概ね達成できている　D:不十分である　E:できていない